



慶應義塾大学ビジネス・スクール

日本人留学生 田中功一

5

ハーバード・ビジネス・スクールに入学して新学期が始まり、6週間たった10月半ばの金曜日、田中功一（彼はKhoというニックネームで呼ばれていた）は、次の月曜日が祝日であるため、初めての三連休を迎えるようとしていた。彼は31歳の日本人MBAの1年生であった。

10

授業が終わリアパートにもどると、メールボックスに大きな封筒が入っているのに気がついた。それは、彼の書いたレポートに教師が評点とコメントをつけて、返却してきたものであった。封筒を開けながら、安堵と不安の気持ちが交錯していた。この三連休で、ハーバード・ビジネス・スクールへ入学して以来初めて一息つけるとはいいうものの、レポートのフィードバックは彼の6週間の努力の実質的な成績評価になっているのであった。この短いレポートを書くのに、田中は、ほぼまる2日の時間を使っていた。ハーバードを卒業するということは、彼にとって莫大に大きなことであった。フィードバックされたレポートを受け取った瞬間、そこに全生涯を感じた。心臓が早まるのを意識しながら封筒を開けた。

15

20

赤インクで書かれた2、3のコメントが田中の目をとらえた。不安になった。ページをくると、もっとたくさんのコメントやアンダーラインが書き込まれていた。最後のページに赤インクで次のような批評が書かれていた。

25

「Kho！私はかなり強い調子で君のレポートを批判している。言葉が多すぎる、文章が長すぎる、しかも中身がない。理解できないセンテンスがいくつかある。おまけに君の論理は臆病だ。もっと意見をはっきりと主張すべきだ。」

30

田中は意識を失いそうな気持ちになった。このコメントで彼は地獄に落とされたようになった。誰か話し相手を求めて、彼のアパートのルームメイト（ハーバードの他学部の日本人留学生）はまだもどっていなかった。MBAの日本人の友人にも電話をしたが、留守であった。田中は、この恐ろしいコメントを読み直しますます気分が悪くなり、

このケースは、クラス討議の資料として用いるために、慶應義塾大学大学院経営管理研究科助手高木晴夫が昭和59年に作成した。ケース中の人の名、及び若干の周辺的事実は偽装されている。

35